



Title	フッサールとアヴェナリウス：生活世界の起源について
Author(s)	山口, 弘多郎
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2015, 49, p. 49-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61358
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フッサールとアヴェナリウス 生活世界の起源について

山口 弘多郎

キーワード：アヴェナリウス／周囲世界／生活世界／自然科学／自然学者

はじめに

エトムント・フッサールの「生活世界」概念がリチャード・アヴェナリウスの「自然的世界」概念から成立したことは、定説となっている。そのため、生活世界概念の起源を問い合わせ直す必要はないようと思われる。

しかしながら、フッサールがアヴェナリウスの自然的世界概念を研究したのが、1902年。他方、生活世界概念がフッサールのテクスト（著書、講義など）に術語として登場するようになるのは、1920年前後。およそ20年の間がある。生活世界概念の起源が自然的世界概念にあることは確かであっても、どのように自然的世界概念が受容され、どのような過程を経て生活世界概念へ至ったのか、これらが検討される必要があるだろう。

そこで本稿は、アヴェナリウスに対するフッサールの態度を踏まえながら、彼による自然的世界概念の受容を検討し、そして、1902年以降のテクストを使用しながら、自然的世界概念から生活世界へ至る道を追跡する。これによって、自然的世界概念が周囲世界概念として受容され、この周囲世界概念が生活世界概念へと発展したことが明らかになるだろう。

1 自然的世界概念の受容

アヴェナリウスは、エルンスト・マッハと並ぶ一九世紀のドイツ実証主義を代表する哲学者であり、独自の経験批判論を展開している。この論は、二元論的仮定（物と心、外界と内界、客觀と主觀など）や形而上学的カテゴリー（实体や因果関係など）などが混入した経験概念を純化する必要性を唱えている。これを、彼は『純粹経験批判』（1888～90）などにおいて論じている。

本稿が取り上げる彼の自然的世界は、1891年に出版された彼の著書『人間的世界概念』に登場している。『年代記』によれば、1902年2月に、フッサールはこの本を研究しているようだ（Dok I, 70）¹⁾。

しかし、彼がアヴェナリウスのテクストを読むのは、これが最初ではない。1876年にアヴェナリウスが著した論文「最小力量の原理による世界の思考としての哲学」を、1899年9月に読み、1900年に出版した『論理学研究』第一巻において批判している。その概要を、ここで、アヴェナリウスに対するフッサールの態度を明らかにするために見ておこう。

アヴェナリウスの言う最小力量の原理は、動物や人間など生物学的な存在に働くものである。どのような生物も、より小さな力でより大きな成果をあげるような方法を選択して、環境に適応し、自己を保存しようとする。このような原理が、生物の領域だけではなく、学問の領域にも適用される。学者は、ある理論は、もっとも適切でもっとも簡潔な仕方で、対象を説明しなければいけない。例えば、地動説は、天動説よりも簡潔で、天体现象の説明により適しており、より精度の高い予測を可能にしている。

フッサールは、進化論の問題に関わる進化の原理としてこの原理を捉えている。そして、アヴェナリウスの論述に、この原理による認識論の基礎づけという意図を読み取り、その意図に対して否定的な態度を取っている。いうのも、「認識論の思惟經濟的基礎づけは、結局、心理学的基礎づけに帰着

する」(XVIII, 206) からであり、「純粹論理学は、それ自体、すべての思惟経済学に先立つのであり、したがって後者に基づいて前者を建築することは背理である」(XVIII, 211) からである。

以上のように、『論理学研究』の頃、フッサールはアヴェナリウスの最小力量の原理に対して否定的な態度をとっていた。では、『人間的世界概念』のアヴェナリウスに対してはどうだろうか。

まず、この著書における自然的世界に関する議論を概観しよう。²⁾ 前述したように、アヴェナリウスは二元論的仮定などを排除し、それらに先立つ純粹経験の次元へ立ち返ろうとしている。哲学は、そこから出発しなければならないと考えているのである。その純粹経験の場が、自然的世界である。

彼はこの世界を、「私が、自分の哲学の出発点で、存在するものとして、確かなものとして、よく知られたものとして、馴染みのあるものとして、概念的に把握されたものとして、眼前に見出していた世界」³⁾ と定義している。ここで重要なことは、世界が眼前に見出されるという点にある。

この点を明確にするために、別の記述を参照したい。彼は、自然的世界を次のような事態として記述してもいる。「思考や感情を伴う自分が、周囲(Umgebung)の内に自身を見出す」。そして、この周囲には「さまざまな言明を伴う、共にいる人間たち(Mitmenschen)」が属しており、「共にいる人間たちは、自分と同じような存在であり、自分自身も彼らと同じような存在である」⁴⁾ この記述からわかるように、自然的世界とは自分を取り巻く周囲を意味している。だからこそ、この世界は眼前に見出される世界なのである。

自己は自然的世界の内に含まれ、自然的世界は自己の眼前に見出される。このような関係を、彼は「経験批判的な原理的並列関係(empiriokritische Prinzipialkoordination)」⁵⁾ と呼んでいる。「中心項(Zentralglied)」に「自我と呼ばれるもの(Ich-Bezeichnete)」を置き、「対立項(Gegenglied)」に「周囲の構成要素」を置く関係である。これは、二元論的な差別に先立つ次元における関係という意味で、前二元論的な関係であると言えるだろう。

この前二元論的な関係から、彼は、なぜ二元論的仮定が生じるのかを明らかにしている。それは、自然的世界が「投入作用（Introjektion）によって、二つの方向へ分裂する」⁶⁾ からである。「投入作用」とは、人が自分の眼前に見出される経験的事象についての知覚を「共にいる人間」のうちに投入することで、人は一方に「事象」を、他方に「事象についての知覚」を見出すことになる。⁷⁾ この区別から、知覚し経験する場である「外的世界（Aussenwelt）」と、その知覚や経験から成る「内的世界（Innenwelt）」という分裂が、つまり、物と心、客觀と主觀という分裂が生じる。こうした投入作用を「遮断（Ausschaltung）」することによって、「変更されていない自然的世界概念が復旧されること」⁸⁾。これが、アヴェナリウスの議論の概要である。

次に、この議論に対するフッサールの態度を見てみよう。1915年に書かれたと推定される「内在哲学 アヴェナリウス」というテクストに、その態度が示されている。彼は、アヴェナリウスの試みを、「“眼前に見いだされるもの（Vorgefundenen）”を純粹に記述する最初の試み」（XIII, 196）と表し、そこに、「“理論”を立てず、あらゆる理論的先入見を遠ざけ、“与えられるもの”を、与えられるままに詳細に記述する」（XIII, 196）という意図を見て取り、それを「非常に有益な意図」（XIII, 197）と評価している。しかし、他方で、現出者と現出の區別に気付いていないという点で、「純粹現象学的な還元には到達しなかった」と批判もしている（XIII, 197）。つまり、現象学的還元に通じる出発点に立ったという点で評価する一方で、現象学的還元に到達しなかったという点で批判しているのである。この態度は、『論理学研究』における「最小力量の原理」に対する否定的態度と比較すれば、両義的な態度と取れるだろう。

フッサールのアヴェナリウスへの態度が確認できたところで、自然的世界がどのように現象学的研究へ受容されたのかを見ていきたい。

まず、1907年に行われた講義『事物と空間』を見よう。彼は、この導入部分で、自然的経験の世界と学問的理論の世界を対比しつつ、前者の世界について、次のように記述している。「自然的な精神の態度をとっているとき、

私たちの眼前には、ひとつの存在する世界がある」。そして、「私たちは、私たちを除く世界、私たちの周囲（Umgebung）としての世界に対する関係の中心として、私たち自身を見出しているのである」（XVI, 4）。ここでは、自然的経験の世界が眼前に見出される世界であること、そして、自分と世界が中心と周囲という関係にあることが述べられている。

また学問的理論の世界との関係については、次のような例を出しながら記述している。「プラチナのこの断片は、実際には、しかじかの性状の原子複合体であり、しかじかの運動の状態を持っている、と自然科学は言うかもしれない。しかし、そのように語りながら、彼は、彼が見たり、手に持ったり、天秤の上に置くなどする、ここにあるこの事物をいつも規定しているのであり、あるいは、彼は、こういうたぐいの事物について普遍的に語っているのである」（XVI, 6f）。この例は、学問が遂行する理論的規定が、経験において直接与えられる事物に依拠していることを示している。つまり、学問的理論の世界に対して、自然的経験の世界は前学問的な経験の世界なのである。眼前にある世界という点、前学問的な世界であるという点で、アヴェナリウスの自然的 world 概念と重なるだろう。

次に、1910/11年冬学期に行われた講義『現象学の根本問題』を取り上げたい。この講義では、アヴェナリウスについて直接言及されているので、その内容を中心に見よう。

フッサールは、自然的 world と自己の関係について、「私たち誰もが、自我として自分自身を見出し、その時はいつも、自分自身を周囲（Umgebung）の中心として見出す」（XIII, 112）と記述している。世界が自己の周囲である点は、『事物と空間』の自然的経験の世界とも同じだが、この講義では、アヴェナリウスによる自然的 world 概念と自然科学の関係についての理解の仕方に対して批判が行われている。

あくまでもフッサールのアヴェナリウス理解という枠組みにおいてではあるが、彼は、アヴェナリウスが「自然的 world 概念を——もちろん理性的な仕方においてではあるが——変様させるという動機が経験を通じてもたされう

ることを可能なことと見なしている」(XIII, 137) と解釈している。ここにおける「変様」には、自然的世界を離れて、「この世界とは別の世界が、現実の世界であることを見出しうる」(XIII, 138) という意味が含まれている。具体的には、自然科学に従事する時、自然的世界を離れ、客観的世界こそが眞の世界であると見なし得るということである。

世界の内に世界を離れる動機がありうるというこの考えが、フッサールには背理に見える。というのも、「世界には、世界について語ることの意味を破棄するようなものは存在しない」(XIII, 137) からである。『事物と空間』の例が示すように、自然科学は、あくまでも直接経験する世界について普遍的に語る行為であって、この世界から離れるものではないのである。

最後に、1913年に発表された『イデーンI』を確認しよう。

ここでフッサールは、「私が一つの世界を意識する」ことが、「私がその世界を直接的に直観的に眼前に見出すこと、私がその世界を経験することを意味している」(III/1, 56) と述べ、その世界を、「私が自分自身をそのうちに見出し、また同時に、私の周囲世界 (Umwelt) でもあるような世界」(III/1, 58) と規定している。またこの世界を「自然的世界 (natürliche Welt)」とも表し、自然科学の算術的世界と対比している。この二つの世界は別物で、前者は「実在的現実 (reale Wirklichkeit)」であるが、後者はそこに存在しない理念的な世界である。したがって「自然的世界は、算術的世界が組み入れられるような地平ではない」(III/1, 60)。他方、全く異なる二つのこの世界は、自我の態度との関係を持っている。だから、「私は自由に、私の視線と作用を、どちらにも向けることができる」(III/1, 60)。

ただし、ここで注意しなければならないことは、二つの態度が対等ではない点である。「私が一度、算術的世界や似たような他の“諸世界”を、それに対応する態度の遂行によって、わがものとする場合」(III/1, 59) でも、「自然的世界は、“手の届く向こうに存在している (Vorhandene)” のであり、私は依然として自然的態度の中におり、この点はその新しい諸態度によって妨害されることはない」(III/1, 59f)。この記述が示すように、算術的態度に

対して自然的態度が上位に置かれている。算術的態度を取っている間も自然的態度は維持されているという意味で、算術的態度は自然的態度に含まれているのである。

これまで、フッサールがアヴェナリウスの自然的世界概念を研究した1902年以後から1913年までの講義や著作を見てきた。

フッサールは、あらゆる理論的先入見を排除し、眼前に見出されるものを見出されるままに記述するというアヴェナリウスの意図を評価し、眼前に見出されるものの世界として自然的世界概念を捉えた。そして、自然科学との対比という文脈において、自己と世界の中心－周囲関係に着目しながら、『イデーン I』では、この世界概念を周囲世界として記述した。以上のことから、アヴェナリウスの自然的世界概念は、ただちに生活世界概念として取り入れられたのではなく、まずは中心－周囲関係という観点から周囲世界概念として受け入れられたと言えるだろう。

2 周囲世界と生活世界

前節では、アヴェナリウスの自然的世界概念が、フッサールによって、周囲世界概念として受容されたことを見てきた。本節では、『イデーン II』における周囲世界概念と生活世界概念を比較することで、周囲世界概念が生活世界概念へ発展したことを明らかにしたい。

まず周囲世界概念を概観しよう。ここでは、自然主義的態度と人格主義的態度との対比という文脈において、その人格的世界として、周囲世界概念が規定される。「周囲世界とは人格によって彼の諸作用の中で知覚され、想起され、思考的に把握され、あれこれ推測ないし推論される世界である」(IV, 185)。自然主義的態度とは、主に自然科学者がとる態度であり、この態度の相関者は、価値などを捨象された単なる自然である。この態度において人間の心は、「物理的に現出する身体に付加ないしは“組み込まれて”、よく知られた仕方で、身体と共に局所化され局時化される」(IV, 181)。つまり、

自然事実として捉えられるのである。

これに対して、人格主義的態度とは、精神科学者のみながらず、人が生活する際に常に採用している態度である。この態度の内で、自我は「人格」として現れる。つまり、人は、人格として生活しているのである。「人格として生活することは、自分自身を人格として措定し、周囲世界との意識的な面での関係において見出し、その関係の内に身を置くことである」(IV, 183)。

このような二つの態度の対比において周囲世界概念を使用するため、フッサールは、この概念を具体的に記述する際は、自然科学者を例に出している。自然科学者は、自然主義的態度が習慣として身についているため、「彼は習慣的に視野が狭くなっている、研究者としての彼はただ“自然”のみを見ている。しかし彼も他のすべての人と同様、人格として生活しているのであり、自分自身がつねに自分の周囲世界の主観であることを“知っている”」(IV, 183)。

この例は、自然主義的態度を取る自然科学者といえども、研究から離れ日常生活を送る時は、他の人と同様に周囲世界の主観となっていると読めるだろう。しかし、それだけではない。この例を考える際、前節で見た算術的態度と自然的態度の対比も考慮に入れる必要がある。本来、自然主義的態度も人格主義的態度も広義の自然的態度に含まれるが、『イデーン I』の算術的態度と自然的態度の対比と、『イデーン II』の自然主義的態度と人格主義的態度の対比は重なっている。

人格は、自然主義的態度と人格主義的態度、どちらも自由にとることができる。この点だけを見れば、上記の解釈も成立するだろう。だが、両態度は、一方の態度が遂行されている間、他方の態度は遂行されないという対等の関係ではない。人格主義的態度が遂行されている間、自然主義的態度は遂行されないが、自然主義的態度が遂行されている間、人格は依然として人格主義的態度の中にいる。両態度は、人格主義的態度を上位に置いた関係にある。だからこそ、フッサールは「自然主義的態度は人格主義的態度に従属している」(IV, 183)と述べているのである。

したがって、両態度の対比において周囲世界概念が使用される際、この世界は具体的に、自然科学者が科学的研究から離れ人格主義的態度のみの下で日常生活を送っている時の世界だけではなく、彼がその研究に従事している時の世界をも指し得るのである。

次に生活世界概念について概観したいのだが、その前に、『イデーン II』というテクストの成立について、その経緯を簡単にまとめたい。『イデーン II』成立過程のどの段階で、生活世界という語が挿入されたのか、その時期を確認したいからである。

この語は、第三篇「精神的世界の構成」の中で、「注記」という形で登場し、また付論 XIII にも現われる。この第三篇には、元となる原草稿があり、それが「第三篇（精神的世界の構成）のための主要草稿」いわゆる「H 草稿」である。M・ビーメルによれば、この草稿は、1913 年にフッサールによって書かれ、1918 年に E・シュタインによる推敲を受け、1924 年までにフッサールによって改訂され、さらに 1924/25 年に L・ラントグレーベの推敲も受けている (IV, 397-400)。また、生活世界の語が含まれる「注記」は、ラントグレーベによって挿入されており (IV, 414)、「付論」は 20 年代前半に成立したと見られている (IV, 423)。したがって、生活世界という語が挿入されたのは、20 年代前半だと推察される。周囲世界概念と生活世界概念の間に、多少の時期のズレがあるのである。⁹⁾

時期を確認できたので、その挿入されたテクストにおいて、生活世界がどのように使用されるのかを見よう。「注記」では、次のように使われている。「自然科学者は、自然を研究している場合でさえも、つねに彼の生活世界である人格的世界の中で生活している人格として、自分自身を見出している。ただし、彼はもっぱら物理的あるいは動物学的な自然などにだけ理論的に向けてられている。したがって、自然としての統握は人格的な統握に従属する。研究している私は単なる事象に向かっているが、しかしあた事象との関係にある人格にも向かうる」(IV, 288Rb)。

一見して、この記述が、前出の人格主義的態度の記述と類似していること

がわかるだろう。「自然としての統握」が、「人格的な統握」に従属している点、これは自然主義的態度と人格主義的態度の従属関係に対応している。そして、「自然を研究している場合でさえも（selbst wo er Natur erfordert）」という点。特に「さえも（selbst）」という箇所を強調したい。自然主義的態度の遂行中でさえも、自然科学者は人格主義的態度の内にいるのである。周囲世界と同様、自然科学における生活世界も、自然科学者が日常生活を営んでいる時の世界だけではなく、彼が科学研究に従事している時の世界も指し得る。

これまで、周囲世界概念の記述と生活世界概念の記述を比較してきたが、どちらの世界も、その具体的な内実が共通していた。このことから、周囲世界概念が生活世界概念へ発展していったことが言えるだろう。

おわりに

本稿では、生活世界概念が自然的世界概念から出発し、周囲世界概念を経て形成されてきた概念であることを見てきた。つまり、生活世界概念の起源を確認してきたわけだが、このことが生活世界の概念史においてどのような意味を持つのか、これを最後に、先行研究と比較しながら論じたい。

もともと生活世界概念は、フッサールの晩年を代表する概念とみなされてきた。表立って主題的に扱われたのは、晩年に発表された論文『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』と略記）においてだった。ここには、生活世界から超越論的現象学へ至る道が示されている。

L・ラントグレーベは、『イデーン I』においてデカルト主義的な道を示していたフッサールが1923/24年の講義『第一哲学』や『危機』で示した新しい道を、デカルト主義からの離反だと考えた。

これに対して、M・ゾンマーは、生活世界概念の歴史を、フッサールが在籍していた大学の名から「ゲッティング期の生活世界」と「フライブルク期の生活世界」に分けた¹⁰⁾。そして、生活世界概念を、デカルト主義からの

離反としてではなく、デカルト主義を補うものとして捉えた。また、ゲッティンゲン期の生活世界とフライブルグ期の生活世界の違いを明らかにしつつ、デカルト主義からの離反と考えられていた変化を生活世界概念の変化として明らかにしている。

フッサール全集第39巻の編者R・ゾーヴァは、その序文において、生活世界概念の形成をアヴェナリウスの自然的世界概念とディルタイの生の哲学との結びつきの下で捉え、その発展を「超越論的感性論」と関連づけている¹¹⁾。

彼らに対して、本稿は、生活世界概念を周囲世界概念を経て形成された概念として論じてきた。そして、自然主義的態度と人格主義的態度の関係に注意しながら、この世界がどのような世界を指しているのかを明らかにしてきた。こうすることによって、生活世界概念が、『イデーンI』から『危機』まで、一貫して保持していたものをも明らかにすることができる。

『危機』の次の箇所を見てみよう。「学問は、人間の精神の作業であって、その作業は歴史的に、またどんな学ぶ者にとっても、存在するものとしてあらかじめ共通に与えられている直観的な生活周囲世界（Lebensumwelt）から出発することを前提にしている」（VI, 123）。ここでは、生活周囲世界という二つの概念を一つにした語が使われており、この世界が具体的には次のように説明される。「その世界は、例えば物理学者に対して、彼がその中で計測器を見たり、拍節器を聞いたり、量を見ながら測定したりなどする世界であり、しかも 彼自身が、さまざまな行為や理論的思考を行なながら、その中に含まれていることを知っているような世界である」（VI, 123f）。

さらにフッサールは、AINシュタインも例に挙げている。AINシュタインは、相対性理論を構築する際、マイケルソンの実験を利用しているが、そのことについて、次のように説明している。「マイケルソンが共同の生活世界において活動し、成果をあげながら生き生きと現に存在しているということは、マイケルソンの実験に関してAINシュタインが行った客観的科学の問題提起、企図、作業などのすべてにとって、いつもすでに前提になって

いる」(VI, 128)。

この二つの例からわかるように、生活周囲世界も生活世界も、自然科学との関係においては、具体的に、自然学者が科学的研究に従事している時もその内で生きている世界を指している。『危機』の生活世界も、『イデーン I』と同様の具体的内実を持っているのである。

近年、生活世界に関わるテクストをまとめたフッサール全集第三九巻が刊行され、生活世界概念が、その起源から晩年にかけて様々な拡がりを見せていくことがわかってきていている。その拡がりは、自然科学批判の枠組みも超えている。しかし他方で、この概念は自然科学との関係において論じられ、周囲世界概念由来の概念として中心－周囲関係を保持し、一貫して、学者が、日常生活を送る時の世界だけではなく、学者が学問に従事している時でもその内で生きている世界をも指している。

本稿は、「生活世界」概念の起源がアヴェナリウスの自然的・世界概念にあるという定説を再検討し、この概念が周囲世界概念を経て形成されたものであることを明らかにした。そうすることによってこの概念が、起源から晩年まで、一貫した具体的内実を持つことも明らかにした。これは、この概念の歴史を考察する際の基軸の一つを提供することであり、今後は、周囲世界概念を基軸とした生活世界の概念史を課題としていきたい。

[注]

- 1) フッサール全集(Husserliana)からの引用は慣例にしたがい、本文中括弧内に巻数をローマ数字で、またページ数をアラビア数字で表記した。フッサール全集記録集(Husserliana Dokumente)からの引用は、Dokという略号を用い、その後に巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で併記して示した。分冊になっている巻の場合は、巻数をIII/1のように表記した。
- 2) フッサールは、初版を使用していた。しかし本稿は、資料的な制約から、1905年に出版された第二版を使用する。ただし、第二版の序言によれば、初版との間に内容の変更はないので、引用した箇所も初版とほとんど変わりない。
- 3) Avenarius, R : *Der menschliche Weltbegriff*, Leipzig, 1905, S.5.

- 4) Ibid., S.5.
- 5) Ibid., S.84.
- 6) Ibid., S.29.
- 7) Ibid., S.27f.
- 8) Ibid., S.93.
- 9) 『イデーンII』の成立については、榎原[2009]に詳細な説明がある。
- 10) Sommer [1984], S.XI.
- 11) 本稿では、フッサールとディルタイの関係について取り上げることができなかつた。しかし、生概念を巡る二人の関係に言及できなかつたことは、本稿が二人の思想的関係を生活世界概念の成立から除外していることを意味するわけではない。ディルタイとの関係については、別の機会に論じたい。

[参考文献]

- Landgrebe, L: *Der Weg der Phänomenologie. Das Problem einer ursprünglichen Erfahrung*, Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, Gütersloh, 1963.
- Sommer, M: *Husserls Göttinger Lebenswelt*, in: Edmund Husserl, *Die Konstitution der geistigen Welt*, Hamburg 1984, S. IX–XLIV.
- 榎原哲也:『フッサール現象学の生成 方法の成立と展開』、東京大学出版会、2009年.

(大学院博士後期課程学生)

Zusammenfassung

Husserl und Avenarius vom Ursprung der Lebenswelt

Kotaro YAMAGUCHI

Nach derzeit vorherrschender Ansicht stammt Edmund Husserl's Begriff der Lebenswelt aus Richard Avenarius's Konzeption der natürlichen Welt. Daher ist es nicht nötig, den Ursprung des Begriffes Lebenswelt erneut nachzufragen.

Um das Jahr 1902 befasste sich Husserl mit der Erforschung von Avenarius' Konzept der natürlichen Welt. Der Begriff „Lebenswelt“ taucht in Husserls Texten jedoch erst etwa 1920 auf, d.h. nach einem Zeitraum von etwa zwanzig Jahren.

Auch wenn der Begriff natürliche Welt die Grundlage für den Begriff Lebenswelt bildet, ist es trotzdem erforderlich aufzuklären, wie Husserl den Begriff natürliche Welt aufgenommen und letztendlich den Begriff der Lebenswelt entwickelt hat.

Der vorliegende Aufsatz untersucht unter Berücksichtigung Husserl's Einstellung zu Avenarius die Texte von 1902 bis etwa 1920 und stellt die Entwicklung vom Begriff natürlichen Welt zum Lebenswelt dar. Auf diese Weise wird gezeigt, dass der Begriff natürliche Welt als Umweltbegriff verstanden wurde und sich der Begriff der Lebenswelt schließlich von dort aus entwickelt hat.